

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12545

研究課題名(和文)ヘレニズム期における小アジアのポリスとローマ帝国主義に関する総合的研究

研究課題名(英文)Greek Cities in Hellenistic Asia Minor and the Imperialism of the Roman Republic

研究代表者

藤井 崇 (Fujii, Takashi)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：50708683

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ヘレニズム期の小アジア西部におけるギリシア人都市を対象に、これらの都市の市民軍がローマの東地中海における覇権の成立にどのような貢献をし、その貢献がその後の都市のアイデンティティ形成にどのような役割を果たしたのかを明らかにすることを目的とした。この研究課題にたいし本研究は、アプロディシ阿斯などの重要なケース・スタディを基盤として、ギリシア人都市の小帝国主義の実態を確認し、ローマの帝国主義との深い関係性を明らかにした。さらに、こうしたローマへの軍事貢献が、帝政期のギリシア人都市の歴史的記憶に編成された状況も分析した。これに関連した国際研究集会の開催、共著の出版、学会報告などをおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

前2世紀以降のローマ帝国成立について、本研究は、東地中海ならびに近東地域に古くから存在していたギリシア人都市の軍事力のローマ帝国主義との結びつきに注目して研究をおこなった。その結果、ギリシア人都市の軍事力が都市の政治的、社会的伝統に従いながらも、ローマ帝国主義への積極的関与を果たしていること、そしてそうした共同の軍事行動の実績が、のちの時代にも重要な過去として記憶されていたことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The aim of the present research project was to, focusing on the Greek cities in Asia Minor in the Hellenistic period, study the ways in which their civic armies took part in the Roman imperialism from the end of the third century BCE on, and to trace to the Imperial period the impacts of these military collaborations on the collective memories of the Greek cities. The present research has successfully shown that the Greek cities participated in Roman military campaigns, following their own traditional political and social frameworks as well as profiting from the privileges given by Rome and individual Roman generals. In some cities, the memories of these military collaborations survived into the Imperial period in the form of inscriptions and monuments, thus making part of the collective memories of the cities. These results were communicated in national/ international conferences, and published in research papers.

研究分野：ヘレニズム史、ローマ帝国史、ギリシア語刻文学

キーワード：ローマ帝国 ヘレニズム ポリス 帝国主義 アプロディシ阿斯

1. 研究開始当初の背景

本研究には、以下の三つの学術的背景がある。第一は、ヘレニズム期のギリシア人都市の自治とそれを支えた軍事力をめぐる議論である。自治を維持したヘレニズム期の都市では、近隣の都市にたいする侵略やヘレニズム諸王国にたいする防衛戦争が頻繁におこなわれていた。この状況は、都市の小帝国主義と呼ばれている (Ma, *Une culture militaire en Asie Mineure hellénistique?*, 2004)。本研究では、ローマの戦争への都市の軍事協力を注目して、都市の小帝国主義がローマの帝国支配といかなる関係にあったのかを解明する。

本研究の第二の背景は、ローマ帝国主義のメカニズムをめぐる議論である。ローマへの補助軍を提供した被支配地域について、ローマの政治家が個人的権威と友誼を基盤とするクリエンテラ関係で被支配地域の軍事力を動員して、帝国支配を進めたと主張されてきた (吉村「属州クリエンテラと補助軍」2003 (初出は 1961))。こうしたローマ中心主義的な見方にたいして、本研究は、軍事力を支えた都市の制度や文化に注目し、いわば下からの帝国主義形成の過程を明らかにする。

本研究の第三の学術的背景は、ローマ帝政期のギリシア人都市の文化的記憶というテーマである。帝政期には都市の軍事的機能がほぼ完全に停止する一方、ローマ支配という政治的現実のなかで自己のアイデンティティを確立するために、都市の神話的出自や建国譚をローマに関連づける形で改変して、それぞれの文化的記憶を構築した (Whitmarsh, ed., *Local Knowledge and Microidentities in the Imperial Greek World*, 2010)。本研究は、こうした帝政期の都市の文化的記憶の形成において、ヘレニズム期におけるローマへの軍事的貢献が果たした役割に注目する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ヘレニズム期 (特に前 2 世紀前半から前 1 世紀末まで) の小アジア西部におけるギリシア人都市 (ポリス) に関して、これらの都市の市民軍が、共和政ローマの東地中海における帝国主義の進展と支配の成立にどのような協力・貢献をし、その協力・貢献がローマ帝政期 (おおよそ前 1 世紀末から 3 世紀まで) におけるギリシア人都市のアイデンティティならびに文化的記憶の形成にどのような役割を果たしたのかを、主に刻文史料と文献史料から明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究の第一の論点であるギリシア人都市のローマ帝国主義への協力については、文献史料とヘレニズム期のギリシア人都市で建立された刻文の分析が、主要なアプローチとなる。文献史料については、アウグストゥス期を生きたストラボンの『地理誌』から、小アジアのギリシア都市のローマ支配への協力の事例を多数拾い出すことが可能である。また、刻文史料については、ローマへの軍事協力を指導した都市名望家を讃える顕彰刻文 (たとえばメトロポリスやコロポン出土のもの) をもとに、ローマへの軍事協力のメカニズム、具体的にはその主導者、ローマとの指揮権の分担方法、兵士の出自などについて、具体的な分析が可能となる。本研究の第二の論点である帝政期におけるローマへの軍事協力の記憶についても、主要な研究方法は関連する文献史料と刻文史料の読解となるが、特に有益なのは、上記のような刻文が、帝政期の都市景観のなかでモニュメントとして存続した状況を分析することである。恒久的な素材に刻まれたローマへの軍事貢献の記録は、帝政期になっても都市の文化的記憶の一部として都市景観を構成したと考えられる。

4. 研究成果

本研究は、おおむね順調に進めることができた。まず、ヘレニズム期後期のギリシア人都市とローマとの関係を扱った論文 (下記番号 1) において、前 2 世紀以降のローマ帝国拡大とヘレニズム王国・ギリシア人都市との関係を、前 220 年から前 2 世紀半ばまで丹念に分析した上で、ギリシア人都市の小帝国主義の実態とその制度的、社会的基盤を確認した。すでにヘレニズム王国とギブ・アンド・テイクの相互関係を結んでいたギリシア人都市は、その相手がローマ帝国・将軍となっても、おおむねそうした関係性を継続していった。彼らのローマへの軍事協力も、基本的にはこうした相互関係のなかでおこなわれていったと考えられる。

その後、小アジアのギリシア人都市のローマへの軍事貢献に関する事例を刻文史料や文献史料から収集し、そうした軍事貢献の特徴をギリシア人都市の実態に位置づけた成果を報告した (下記番号 2)。分析対象とした都市としては、サルデイス、メトロポリス、コロポン、バルギュリア、スミュルナ、アプロディシアスなどがあげられる。こうした分析の成果を、ヘレニズム期・

共和政期のシチリアを対象としてギリシア人都市とローマとの軍事協力の実態を解明した Prag の近年の研究 (Auxilia and Gymnasia: A Sicilian Model of Roman Imperialism, 2007) と対比させつつ、前 2 世紀半ば以降台頭してきた都市の名望家層がローマへの軍事貢献を主導していたこと、都市の軍事力が伝統的なギュムナシオン (体育教育施設) に立脚していたこと、そして軍事貢献を主導した名望家にたいする顕彰が、あくまで都市行政の文脈でおこなわれていたことを明らかにした。

本研究の重要な事例研究の対象である小アジア・カリア地方 (現トルコ共和国) のギリシア人都市アプロディシアスについては、ニューヨーク大学とオクスフォード大学が組織する発掘調査隊に、2014 年、2015 年、そして本研究の研究期間である 2021 年に刻文研究者として参加し、現地調査を進める一方で、発掘調査責任者の R. R. R. Smith 教授 (オクスフォード大学) と Angelos Chaniotis 教授 (プリンストン高等研究所) と緊密な意見交換をおこなった。さらに本研究では、この両教授を含めた 4 名の海外研究者を招聘して、2019 年 6 月に東京でアプロディシアスについての国際研究集会を開催し、そこでこの都市のローマへの軍事貢献を示す刻文を詳細に検討した (下記番号 3)。この刻文はヘレニズム期後期のローマへの軍事貢献を伝えているが、帝政期に入って都市の劇場の目立つ場所に刻みなおされたもので、過去の軍事貢献が帝政期の都市の文化的記憶に組み込まれた状況を詳細に物語る事例である。こうした事例は、上に述べた本研究の学術的背景の三つ目のポイントに大きく関わるもので、ローマとの軍事協力がギリシア人都市に継続的に与えた影響という点で、非常に興味深い。

本研究は、ローマへの軍事協力の記憶の問題をさらに検討し、その成果を学会で報告した (下記番号 4)。この学会報告は、「古代地中海世界における知の動態と文化的記憶」と題された小シンポジウムのなかでおこなわれたもので、エジプトやローマ共和政期・帝政期の文化的記憶を専門とする研究者との共同作業の成果の一つでもある。ここでは、これまであまり分析してこなかったローマ帝政期のギリシア人が生み出した文献史料 (たとえばプルタルコス『英雄伝』) を集約的に検討し、ヘレニズム期のローマとの軍事協力という事実が、少なくとも帝政初期まではギリシア人都市の文化的記憶のなかにしっかりと組み込まれていたことを明らかにした。これは、帝政期のギリシア人の文化運動とされる第二次ソピストたちの活動ではローマの内乱は記憶の対象とはならなかったという伝統的見解 (たとえば Bowie, *Greeks and Their Past in the Second Sophistic*, 1970) に反する分析結果であり、本研究の重要な成果の一つである。

さらに、以上の研究成果を総合する形で、ヘレニズム期から帝政初期 (おおよそ前 2 世紀から 3 世紀まで) を幅広く対象としてローマ帝国とギリシア人との関係を検討する論文を、日本を代表する歴史学の全集に寄せた (下記番号 5)。ここでは、ギリシア人の神話・歴史理解、ギリシア人とローマ市民権の関係、ローマ帝国の「グローバル化」のなかでのギリシア人の移動、ギリシア人の夢におけるローマ帝国のあり方など多様なトピックを扱ったが、ヘレニズム期におけるギリシア人都市のローマへの軍事協力と、帝政期におけるそうした軍事協力の記憶の存続が、ローマ帝国におけるより幅広い帝国行政とギリシア人都市名望家層の協働関係の基礎の一部となったという主張は、本研究の最終的な結論の一つとしてここで強調しておきたい。

以上のような本研究の成果は、本研究を基課題とする国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (A)) 「ローマ帝国形成期におけるギリシア人都市名望家層に関する国際共同研究」にて、さらに発展される予定である。

1. 「消滅するヘレニズム世界」南川高志編『歴史の転換期 1 : B. C. 220 年 : 帝国と世界史の誕生』山川出版社, 84-145, 2018. (共著)
2. 「二つの帝国主義 : ヘレニズム期小アジアの都市とローマの支配」第 86 回京都大学西洋史読書会大会, 京都大学, 2018. (学会報告)
3. 'Greek Contribution to Roman Imperialism: The Aphrodisian Case in Contexts', *War and Peace in Roman Aphrodisias, 50 BC-AD 250*, 関西学院大学東京丸の内キャンパス, 2019. (学会報告)
4. 「ローマの戦争とその記憶 : ギリシア人の視点から」第 71 回日本西洋史学会大会, 武蔵大学, 2021. (学会報告)
5. 「ローマ帝国の支配とギリシア人の世界」大黒俊二・林佳世子責任編集、南川高志編集協力『岩波講座 世界歴史 3 : ローマ帝国と西アジア 前三～七世紀』岩波書店, 81-106, 2021. (共著)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 アンゲロス・ハニオティス（藤井崇訳・解題）	4. 巻 1154
2. 論文標題 誰も寝てはならぬ！：夜のギリシア	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 29-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 藤井崇
2. 発表標題 ローマの戦争とその記憶：ギリシア人の視点から
3. 学会等名 第71回日本西洋史学会大会「小シンポジウム I：古代地中海世界における知の動態と「文化的記憶」」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤井崇
2. 発表標題 アレクサンドロス以降のギリシア人の歴史：岸本氏の単著刊行によせて
3. 学会等名 古代史研究会特別研究集会「古代ギリシア史研究の現在地：古典期・ヘレニズム期・帝政期の対話」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Takashi Fujii
2. 発表標題 'Greekness' in the Inscriptions of Hellenistic and Imperial Cyprus.
3. 学会等名 東北師範大学（中国）世界古典文明史研究所セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takashi Fujii
2. 発表標題 Greek Contribution to Roman Imperialism: The Aphrodisian Case in Contexts.
3. 学会等名 War and Peace in Roman Aphrodisias, 50 BC-AD 250 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takashi Fujii
2. 発表標題 Hellenistic and Imperial Cyprus: What Was It Like to Be Civic?
3. 学会等名 Ancient History Seminar, Faculty of Classics, ケンブリッジ大学(イギリス)(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤井崇
2. 発表標題 二つの帝国主義：ヘレニズム期小アジアの都市とローマの支配
3. 学会等名 第86回西洋史読書会大会(京都大学)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 南川 高志、井上 文則	4. 発行年 2021年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 400
3. 書名 生き方と感情の歴史学	

1. 著者名 荒川 正晴、大黒 俊二、小川 幸司、木畑 洋一、富谷 至、中野 聡、永原 陽子、林 佳世子、弘末 雅士、 安村 直己、吉澤 誠一郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 306
3. 書名 ローマ帝国と西アジア 前3-7世紀	

1. 著者名 金澤 周作、藤井 崇、青谷 秀紀、古谷 大輔、坂本 優一郎、小野沢 透	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 340
3. 書名 論点・西洋史学	

1. 著者名 南川 高志、藤井 崇、宮崎 麻子、宮宅 潔	4. 発行年 2018年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 300
3. 書名 B.C.220年 帝国と世界史の誕生	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	スミス パート (Smith R.R.R.)		
研究協力者	ハニオティス アンゲロス (Chaniotis Angelos)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ハレット クリストファー (Hallett Christopher)		
研究協力者	トーマス ジョシュア (Thomas Joshua)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 Aphrodisias Workshop: War and Peace in Roman Aphrodisias, 50 BC-AD 250.	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 第4回日欧古代地中海世界コロキウム	開催年 2018年～2018年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
英国	オクスフォード大学	プリンストン高等研究所	カリフォルニア大学